

家事・ケア労働者による産育実践とその受容
-中国上海市を事例に-

○翁 文静 (九州大学)

1.はじめに

中国の一般家庭ではかつて、女性たち、主に祖母と姑が産婦と子どものケアを担い、様々な禁忌と経験を伝えていく習慣があった(候 2004,姚 2009)。しかし、今の都市部では、専門的な知識と技術を身につけ、国家資格を取得する家事・ケア労働者(中国語では家政服務員 *fuwuyuan*)が出現し、普及しつつある(姚 2009,翁 2014)。本発表は家事・ケア労働者の中、妊産婦・新生児、乳幼児のケアに関わる専門職(中国語ではそれぞれ、月嫂 *yuesao*、育兒嫂 *yuersao* 呼ぶ)に注目し、彼女らの行う「科学 *kexue*」産育実践とはいかなるものなのか、また、雇用者がその実践をいかに受容するのかを明らかにしたい。

2. 本発表の視点と方法

(1) 本発表の視点

天田(2017)によれば、J ドンズロは 20 世紀のフランス社会におけるソーシャルワーカーを取り上げ、彼らは司法・児童精神医学・教育機関の三者が構成する未成年者のための「保護複合体」と「家族」とを媒介していくエージェントであると指摘した。本発表は家事・ケア労働者の用いる様々な知識と技術を「産育複合体」と呼び、彼女たちを「産育複合体」と「家族」との間のエージェントとみなす。

また、発表者は社会人類学者の田辺の提唱した「実践」概念を参考し、家事・ケア労働者が言語、知識、技術、様々な人びとの相互行為の複雑な関係の中で出産・育児に関する知識と技術を身に付け、遂行していく過程を産育実践として捉えている。

(2) 方法

本発表で用いる主な資料とデータは、2013 年 8 月から 2019 年 1 月末の 5 回のインタビュー及び参与観察調査によって収集している。主な調査場所及び対象は、①上海市の R トレーニングセンターで月嫂(*sao*)養成トレーニングを受ける女性たち、②同センターで育兒嫂養成トレーニングを受ける女性たち、③H 派遣会社で登録した女性たちである。

3. 家事・ケア労働者による産育実践とその受容

(1) 家事・ケア労働者による「科学 *kexue*」産育実践とは

家事・ケア労働者たちはトレーニングセンターで座学及び実技を学び、また、病院研修を経て雇用主宅に派遣されていく。彼女らの殆どが「センターや病院で学んだ知識と技術がとても役に立った」、「大変勉強になった」などと語った。

家事・ケア労働者たちはこれまで身につけた医学(伝統医学も含む)、心理学、教育学などの知識・技術を用いて、対象となる家族のケアを行い、「科学 *kexue*」産育実践を遂行、普及していくことが明らかになった。医学、心理学、教育学などの知識・技術を「産育複合体」と呼ぶと、家事・ケア労働者は「産育複合体」と「家族」との媒介であると見なすことができる。

(2) 「科学 *kexue*」産育実践の受容

インタビューと参与観察を通して、新人に比べてベテランの家事・ケア労働者の行う「科学 *kexue*」産育実践がより雇用主に受け入れられやすいことが明らかになった。また、雇用主の違いを見ると、シニア世代より、ジュニア世代がより家事・ケア労働者の行う「科学 *kexue*」産育実践をより積極的に支持する傾向が見られた。その理由は「ジュニア世代の持っている知識と家事・ケア労働者の学んできたものとほぼ一致する」などである。

キーワード：家事・ケア労働者、産育実践の受容、エージェント)